

〔研究ノート〕

平安貴族の中国風教養について

——『日本国見在書目録』よりみての一考——

杉 本 憲 司*

平安貴族の中国文化についての教養が、前代の貴族と同様相当高いことはいうまでもなく、ことさらに述べる必要もない。特に、平安時代になると嵯峨・淳和両帝による「漢風」讃美が、文学の上に大きな影響を与えたことはつとに有名なことである。遣隋使・遣唐使の派遣による積極的な隋・唐文化の摂取は、我が国の文化、それのない手である貴族の中国風教養をたかめたが、その一つの證しとして、『日本国見在書目録』なるものを取りあげることができる。そこにのせられている中国書籍の目録について若干の考察を加えることによって、平安貴族の中国風教養の一斑をみることを試みてみたい。

『日本国見在書目録』についての先人の研究は多く、それらを参照してみれば、『外典書籍目録』『本朝在書目録』ともいわれ、藤原佐世なる人が、貞観17(875)年正月に、当時多くの書籍が蔵せられていた宮中の祕閣「冷然院」が、火災にあったのを契機として、当時、わが国にあった書籍の目録を勅選で作ったもので、内容はごく一部国書を含むが大部分は中国の書籍である。成立年代については諸説存在するが、佐世が寛平3(891)年に陸奥守となり、東北の地に流謫させられる間の約16年の間のいずれかの時に撰せられたといわれている。本の内容は『隋書』經籍志の分類に応じて、「易家」以下「惣集家」にいたる40家に分けて書かれている。内容は極く一部に国書(約12種か)、日本人の編纂抄録をしたものが含まれているが、中国書籍の分類目録で、書名、巻数がしるされ、ときには撰者名などが注記されている。掲載されている書籍は、1579部、17,345巻もあり、その数量と内容から、平安貴族の教養の深さが読みとれる。

そこで、書籍の内容はともかく、各家の部数と巻数だけを単純にとりあげ、それが『隋書』經籍志、『旧唐書』經籍志、『新唐書』芸文志と比較し、特に『日本国見在書

* 佛敎大学文学部敎授、佛敎大学総合研究所嘱託研究員(平成4、5年度)

	日本国見在書目録				隋書	経籍志	旧唐書	経籍志	新唐書	芸文志
			旧唐書との比較							
易家	33部	177巻	42.3	26.3	78部	673巻	78部	673巻	88部	665巻
尚書家	14	111	48.2	40.8	32	247	29	272	33	306
詩家	15	168	50.0	53.6	39	442	30	313	31	322
礼家	46	1171	44.2	60.2	36	1622	104	1945	96	1827
楽家	23	207	79.3	106	42	142	29	195	38	257
春秋家	35	379	34.3	32.0	97	983	102	1184	100	1163
孝経家	20	51	74.0	61.4	18	63	27	83	36	82
論語家	35	285	97.2	90.7	73	781	36	314	37	327
異説家	17	95	47.2	20.0	13	92	36	474	26	381
小学家	158	613	150	76.9	108	447	105	797	103	721
正史家	35	1597	43.2	35.9	67	3083	81	4443	90	4085
古史家	9	240	12.0	17.0	34	666	75	1410	75	1489
雑史家	34	616	33.3	24.0	72	917	102	2559	107	1828
霸史家	3	122			27	335	(旧・新とも雑史家に含まれる)			
起居注家	3	39			44	1189	他のものを含む 104 2233		38	1272
旧事家	4	20			25	404	(旧・新とも起居注家に含まれる)			
職官家	4	41	19.0	18.4	27	336	21	222	26	262
儀注家	11	113	13.0	9.8	59	2029	84	1146	100	1467
刑法家	41	533	80.3	65.4	35	712	51	814	61	1004
雑伝家	40	307	20.6	15.5	217	1286	194	1978	151	1656
土地家	37	298	39.7		39	1432	93	1782 (1187)	106	1292
譜系家	7	7	17.9	0.4	41	360	39	1617	39	1617
簿録家	7	22	38.8	10.1	30	214	18	217	22	406
儒家	15	134	53.5	48.5	62	510	28	276	92	791
道家	62	487	48.8	50.7	78	524	127	960	174	1240
法家	4	38	26.6	24.0	6	72	15	158	15	166
名家	2	4	16.6	7.1	4	7	12	56	12	55
墨家	3	3	100	18.7	3	17	3	16	3	17
縦横家	1	3	25.0	16.6	2	6	4	18	4	15
雑家	94	2412	132.3	245.6	97	2720	71	982	75	1103
農家	2	13	10.0	6.7	5	19	20	192	20	235
小説家	60	578	461.5	642.2	25	155	13	90	41	308
兵家	10	49	22.2	16.9	133	512	45	289	60	319
天文家	83	370	319.2	142.3	97	675	26	260	30	306
曆数家	54	174	93.1	104.1	100	263	58	167	75	237
五行家	154	516	136.2	106.3	272	1022	113	485	160	647
医方家	165	1101	151.3	29.0	256	4510	109	3789	120	4046
楚辞家	6	29			10	29			7	32
別集家	149	1575	26.7	35.3	437	4381	892	12028	750	7668
惣集家	84	2647			107	2213			99	4223

(注:「目録」の部・巻数は矢島玄亮氏の説によった)

目録』(以下『目録』とする)より約四十余年おくれる『旧唐書』經籍志との比率をみることによって、平安貴族の中国風教養のあり方の一面を推測してみたいと思う。

この表をみると、先づ目につくのが小学家のところで、部数からみると『旧唐書』に掲載されたものより多く五割増しにもなり、巻数でも76.9%となっている。この中には日本人の編纂物ではないかと疑われるものがあり、『集縦字』5巻、『新抄借音』5巻、『新撰音淵』4巻、『古今文字苑抄』1巻、『属体法』1巻、『詩病体』1巻、『文音病』1巻、『読異体諸詩法』1巻、『古今詩類』2巻が、その候補にあげられている。それにしても、『千文字』だけでも6種の本があり、この家の本の蒐集に意を付けていることがよくわかる。小学とは文章、言語、文字に関する學門で、『説文解字』『玉篇』という辞書類もあり、平安貴族にとっての外国文学である中国の詩文を勉強するため、今日の私たちが外国語を学習する時に先づ辞書類を揃えるのと規を一つにしているといえよう。しかし、これらの本をみていると気がつくことは、音韻に関する書物の多いことである。これは平安時代の『凌雲(新)集』『文華秀麗集』『經国集』という勅撰の漢詩集の編纂と無関係でない。平安貴族の教養として漢詩をうたうということは、考えてみれば今日、外国語の詩を作るということで、特に詩の場合、押韻が重要であったことから、この方面の書物が数多く輸入され、貴族の間では座右の書として所有されていたのであらうと思われる。このため『旧唐書』にみられないようなものまでが、我が国に入っていたことになるのではなかろうか。

儒学系列の書籍も割合多くみられる。易家から論語家までの部数221は、『旧唐書』にみえる同類の部数の50.8%、巻数2549は51.1%にあたり、比率からだけみて約半数の書籍が我が国に入っていたことになる。これは前代から官吏になる者にとって必要な教養が儒学であったことの伝統で、昔からの蓄積があった部門と思われる。政治にとって必要な書籍として刑法家も、部数で80.3%、巻数で65.4%と相当高い割合で入っている。これに関連するものとして、職官家にみえる『大唐六典』30巻も注目される。また、礼家にみえる『唐開元^{ママ}令(礼)』150巻は礼であるが、これは法で規制する前の段階にある、礼規範による行政から貴族たちの生活全般を律するもので、この書がみられることも注目される。

最近、日本古代の思想において注目される道家思想、中国道教の影響も、道家の老荘思想以外の『本際經』『太上靈宝經』『消魔宝真安志經』や『抱朴子内篇』などの書籍、あるいは五行家、これは比率からみると、部数で136.2%、巻数で106.3%と、『旧唐書』にみられるよりはるかに数が多く、中には我が国での抄録などがあつたりして数が多くなったのかも知れないが、平安時代の陰陽の流行とも関係してか、実に

多くの書籍によって平安貴族は、中国の伝統的教養である儒学とは異なった道家思想を受け入れていたことがうかがえる。天文家、暦数家も比率で非常に多いが、これも道家思想、陰陽学と関係あると思われる。

雑学も比率からみて非常に多くが我が国にもたらされた部門で、『隋書』と比較して部数、巻数ではほとんどがもたらされたと云ってよい数である。内容を見るとここには『修文殿御覧』360巻、『芸文類聚』100巻、『初学記』3(0)巻など類書の類が多くみられ、『旧唐書』『新唐書』と体裁が異なっていることもあるが、この部門の多いことは平安貴族の中国風文化教養に大いにかかわるところである。これは当時、中国古典の原典をみるのではなく、百科全書風のこれら類書に引かれた古典の文をみて、それで事をすましていることにあるようである。

中国のものに比較して極端に少いものに農家の類がある。『隋書』と比較するとそれほど差がないが、『旧唐書』などと比較すると極端に差がみられるのである。そこで少し内容に立ち入ってみてみたい。『目録』では、

『斉民要術』10巻、丹陽賈思協撰

『兆民本業』3巻

の二本をあげているに過ぎない。『隋書』では、『汜勝之書』2巻、『四民月令』1巻、『春秋濟世六常擬議』5巻、『禁苑實録』1巻と『斉民要術』をあげている。更に『旧唐書』では、『目録』『隋書』以外に、『竹譜』1巻、『錢譜』1巻、『種植法』77巻、『相鶴經』1巻、『鷲擊録』20巻、『鷹經』1巻、『蠶經』1巻、『相馬經』1巻、『〃』又3巻、『〃』又2巻、『〃』60巻、『相牛經』1巻、『相貝經』1巻、『養魚經』1巻があげられる。

ここで、以上の三つの書目録にみられるものが、農家の書にあたり、またなにがみえないかを考える基準として、天野元之助『中国古農書考』を参照してみたい。古い時代のものからあげていくと、

『神農書』・『神農教田相土耕種』—『開元占經』所收

『夏小正』—『大載禮記』などに所收

『管子』地員篇

『呂氏春秋』上農・任地・辯地・審時の各篇

『蔡癸書』

『汜勝之書』 前漢 汜勝之撰

『四民月令』 後漢 崔寔撰

『南方草木状』

『竹譜』 晋 載凱之撰

『魏王花木志』

『齊民要術』 北魏 賈思勰撰

『茶經』 唐 陸羽撰

『平泉山居草木記』 唐 李德裕

『保生月錄』 唐 韋行規撰

『四時纂要』 唐 韓鄂撰

『耒耜經』 唐 陸龜蒙撰

が唐代までの農書とされるもので、これでは17種だけである。決して他の各家に比べて多いものではない。そこでこれらの書名を参考にしながら、『書目』にみられる書名をみていくと、他家に農家の類に数えてもよい本がいくつかあることがみられる。たとえば、礼家の『御刪定礼記月令』1巻、『月令図讃』1巻、雑伝家の『荆楚歲時記』1巻、これは日本の年中行事に大きな影響を与えたとされる書籍であるが、ここには農業に関する季節ごとの行事もみられ、農書としての一面がある。法家の『管子』20巻、雑家の『呂氏春秋』26巻、『玉燭宝典』12巻、これも先にのべた『荆楚歲時記』と同じように毎月の行事の中に、農業に関する記事があり、『目録』にみえない『四民月令』の文章が、この『玉燭宝典』の中に長々と引かれている。五行家には、『旧唐書』で農家に入れられている『相馬經』2巻、『相馬經』1巻の外、『伯楽園』7巻、『要集相馬經』1巻、『孫伯楽相馬』1巻、『八駿園』1巻がみられる。また『水牛図』1巻もあって、『旧唐書』と比較して、決して『目録』は極端に少ないとは云えない。これらの外医方家にみえる本草に関する書物も、直接に農業の書とは云えないが、非常に近い書と考えられる。それらには『大清諸草木方集要』1巻、『採葉図』2巻、『治馬病方』1巻、『治馬法』6巻、『治馬病書』6巻、『新修本草』20巻、『神農本草』7巻、『本草図』27巻、『食經』3巻の類などがみられる。

このようにみえてくると、『目録』に農業に関する「農家」の書が少ないことから、平安貴族は農業に関心がなかったとはいえない。中国において農書が多く編纂されてくるのは宋代以後のことであって、『目録』作成よりはるか後の話である。このようにみえてくると、平安貴族は当時の農書として最大のものである『齊民要術』をみていたのであり、また以上にのべた如く、他の家に分類された種々の書から農業に関する基本的な知識は充分に得ることができたと思われる。勿論、このことと貴族たちが直接農業を指導したということとは別である。しかし、貴族たちは官僚でもあったし、また、各自の土地を所有していたことから、農業に関して無関心でいられない。そこ

で『目録』にみえる書物から基本的な知識を獲得していたのであろう。

最後に、一、二のことにふれておきたい。それは、『目録』の小学家に『波斯国字様』1巻、『突厥語』1巻という、はるか西方の文字、言語に関するものがみられる。これは当時の世界帝国であった大唐帝国からの将来品として、他の書籍の中に物めずらしい異国物としてまじってきたものとも考えられるが、しかし別の見方もできる。それは東野治之氏が解読された、もと法隆寺伝来の香木(東京国立博物館蔵の白檀2ヶ)にみえる刻銘と焼印があり、これは刻字がパフラヴィー文字で、「ホーフトーイ」という人名とされ、焼印はソグト文字で「ニーム・シール」と刻され、「半両」という意味であるという話と関連づけて考えることである。この香木のように奈良時代以後、大陸から多くの文物・品物がはいってきたが、これらにはこの香木のような漢字、梵字以外の文字がみられことが多くあったと思われる。貴族達のように高価な輸入品に手をふれる機会が多い場合には、このような文字を解読するための書籍も案外実用の書としての一面を持っていたかも知れない。

以上、『目録』の表面的な読み方から、平安貴族の教養のあり方をみてきたが、そこには前代からの蓄積もあるが、遣唐使たちの積極的な書籍の輸入と、その種類の豊富さと適格さに驚かされる。集部にあたる文学関係の書籍が数多くあるのは従来からよく知られたところであったが、他の部門のものでも必要な書籍は一応揃え、且つ一つの書でもいくつかの種類を入れていることは、今日の研究機関に於ける図書蒐集に通ずるところがあり、図書館学の方でも、この『目録』を重視している意味が理解できる。

《参考文献》

- 矢島玄亮『日本国見在書目録―集証と研究―』汲古書院、1984年
村井康彦編著『日本歴史展望第3巻 平安京にうたう貴族の春』旺文社、1981年
歴史学研究会等編『講座 日本歴史2 古代2』東京大学出版会、1984年
京都市編『京都の歴史1 平安の新京』学芸書林、1970年
太田晶二郎『太田晶二郎著作集』第1冊、吉川弘文館、1991年
小島憲之『上代日本文学と中国文字』上・中・下、塙書房、1962～1965年
門脇禎二・田辺昭三『教養人の日本史(1)』社会思想社、1966年
天野元之助『中国古農書考』龍溪書舎、1975年
東野治之『書の古代史』岩波書店、1994年